

第2回「西山卯三記念叢書」出版助成（2024年度募集）選考結果概要

●採択された著者および原稿

- ・著者：乾 康代（茨城大学元教授）
- ・原稿タイトル（仮）：「原発開発：原子カムラは農漁村で何をしたか」

（次点）

- ・著者：伊達 一穂（東京藝術大学教育研究助手）
- ・原稿タイトル（仮）：「同潤会普通住宅：災害公営住宅のはじまりとその実践」

●応募数：6件

●総評

第2回「西山卯三記念叢書」出版助成には、全6点の応募があった。いずれも人と住まいに関わりの深い内容の出版提案であり、本助成事業の主旨にかなうものだった。5名の選考委員で、二段階の選考を実施した。一次選考では、選考委員全員が申請書および素材となる原稿を読み、1点につき3名が、テーマの独創性とその社会的意義または学術的価値を評価しコメントを記した。これら一次選考結果を集約共有した上で、2024年4月27日に選考委員会を開催し、選考委員全員が集まって2時間半にわたり話し合い、乾康代さんの「原発開発：原子カムラは農漁村で何をしたか」が採択された。

本事業は、2016年度以降刊行されてきた「人と住まい文庫」シリーズの主旨を継承しながらも、同シリーズが小冊子だったのに対してより本格的な書籍の出版を助成すべく2023年度に創設された。第2回である今年度は、建築計画やまちづくりを中心に幅広い応募があり、著者の年齢層も1950年代生まれから1990年代生まれまでであった。若手の学位論文を素材としたものが2点あった。応募原稿はいずれも現代社会における人びとの生活について考えさせられるものだったが、それぞれの視点は異なるため、二次選考の話し合いでは、一点一点の内容に即した異なる物差しで、その独自性や意義を理解するように努めた。

選考にあたっては、内容を総合的に評価して質の高さで判断することを原則とした。応募原稿のなかには、建築・まちづくり・都市計画への関心の裾野をより一般の人たちにも広げることへの貢献が期待できるものから、緻密な調査研究によって住宅史の新たな見方を提示するものまであった。路地や伝統的な独自の風習が息づく京都ならではのまちづくりを取り上げたものが複数あり、京都発で発信する価値について考えさせられるなど、魅力的な原稿が多かった。

そのなかで、都市計画的観点から原発問題に斬り込んだ乾さんの原稿を選出した。本原稿は、なぜ日本では世界に類を見ないほど原子力発電所が居住地に近接しているのか、その原点を東海村開発に見出し、原発が都市計画を歪めた経緯を読み解いている。地域と原発の共生という美しいスローガンに隠されたこうした現実を直視せずして原発依存からの脱却はない。西山卯三記念叢書として刊行されることで、「人と環境にやさしい生活空間の創造」を根幹に据えた地域発展についての研究成果として、原発立地を世に問う一冊となることを願っている。

（岡部 明子／選考委員長）